

# 昭和60年度 生鮮貝類有効利用技術開発研究 (要 約)

今井美代子・中谷 肇・林 義孝・高林 信雄

この研究は、下痢性貝毒により毒化したホタテガイの解毒に関する技術開発のための基礎研究と、その実用化のための研究を実施して、その成果をホタテガイの出荷の安定および消費拡大に役立てようとするものである。なお詳細は、昭和60年度生鮮貝類有効利用技術開発研究報告書として報告した。

## 1 化学・物理・生物学的手法による解毒に関する研究

### 1) 米粉・オキシシン混合投与による解毒試験

昨年度、毒力0.5~1.0MU/g・中腸腺（以下ことわりのない限りMUと記述する）のホタテガイに、米粉・オキシシンを混合投与したところ、1日後に毒力が0.3~0.5MUに低下した。今年度その再試験を行ったところ、開始時0.5~1.0MUであった毒力を、3日後もそのまま維持し、毒力の低下は見られなかった。

### 2) パン酵母、コーンスターチの給餌による解毒試験

給餌量は、パン酵母区、コーンスターチ区のいずれもホタテガイ1個体あたり1日1gとした。両区とも開始時の毒力は1.0~2.0MUであったが、1日後にともに0.3~0.5MUと規制値以下の毒力となった。しかし、3日後には、0.5~1.0MUと再び毒力の上昇が見られ、開始時と同じ毒力となった。

### 3) グルクロン酸ナトリウム、グリシンによる解毒試験

抱合試薬であるグルクロン酸ナトリウム、グリシンをそれぞれ活性炭に吸着させた後、この活性炭をホタテガイに投与して、その解毒効果を検討した。5日間の試験で、グルクロン酸ナトリウム区では開始時の毒力0.5~1.0MUをそのまま維持し、グリシン区では1日後に毒力の上昇が見られた。

### 4) オゾン海水による解毒試験

下痢性貝毒に対するオゾン海水の効果について検討した。開始時0.5~1.0MUのホタテガイは、3日後まで開始時の毒力を維持したが、5日後に0.3~0.5MUと規制値以下の毒力となった。

## 2 給餌方法の検討

昨年度、明暗条件、通気量、餌量濃度とホタテガイの摂餌量との関係について検討したところ、明暗条件に関する実験で結果にばらつきが見られた。このため、今年度その再試験を行ったところ、摂餌量は明暗条件に対して、一定の傾向を示さなかった。